厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）
認知症の人やその家族の視点を重視した認知症高齢者にやさしい薬物療法のための研究
分担研究報告書

認知症患者への薬物治療が生命予後に及ぼす影響についての検討

研究分担者　水上勝義　筑波大学大学院人間総合科学研究科

研究要旨：臨床病理学的に認知症と確定診断された症例の生前の薬物療法と発症から入院までの期間を検討した。その結果、特に慎重な投与を要する薬物の数が3剤以上になると入院までの期間が短くなるリスクとなることが示唆された。

A. 研究目的

ポリファーマシーや特に慎重な投与を要する薬物（PIM）の使用が認知症高齢者の入院までの期間を短くするリスクがあるかを検討する。

B. 研究方法

2012 年 1 月～2016 年 12 月の 5 年間に愛知県内の老人病院に入院，死亡退院し，剖検により臨床神経病理学的に認知症と確定診断された患者を対象に後ろ向き観察研究を行った。

（倫理面への配慮）

筑波大学体育系と当該病院の倫理委員会の承認を得た。

C. 研究結果

PIM は患者の 69.7%に使用され、PIM1-2 剤が 43.4%、PIM3 剤以上は 26.4%であった。入院までの期間短縮リスク因子は、PIM3 剤以上の使用[調整済みハザード比（HR）= 1.823; 95%CI、1.069-3.107; P=0.027]と PIM 総数[調整済みハザード比（HR）= 1.226; 95％CI、1.023-1.469; P=0,028]であった。抗精神病薬やベンゾジアゼピンなど個別の PIM で有意なリス
ク因子となった薬剤はみられなかった。

D. 考察

ポリファーマシーやPIMが入院リスクであることはこれまでも報告されていたが、PIMが入院までの期間にも関連することを見いだした。個々のPIMがリスクとして認めなかった一因として、当該施設の薬物使用量が少なかったことが考えられる。

E. 結論

特に慎重な投与を要する薬物3剤以上が認知症高齢者の入院までの期間短縮リスクであることが示唆された。

F. 健康危険情報

G. 研究発表

1. 論文発表
   現在投稿中
2. 学会発表

松岡珠実、間辺利江、赤津裕康、橋詰良夫、水上勝義. 認知症高齢者の慎重薬剤が臨床経過に及ぼす影響ついての検討. 第62回日本老年医学会学術集会、東京、2020年8月.

H. 知的財産権の出願・登録状況
（予定を含む。）

1. 特許取得
とくになし

2. 実用新案登録
とくになし

3.その他
とくになし